

短期派遣 EUROPA 2010 年度派遣報告書

氏名：説田英香

派遣先：ドイツ フライブルク大学

派遣期間：2010年9月21日～2011年8月7日

研究テーマ：1970年代から80年代ドイツ連邦共和国における外国人労働者

【派遣の概要】

本派遣は、フライブルク大学と東京外国語大学での共同学位取得を最終目的とした研究計画の1年目にあたり、報告者は、2010年度冬学期以降、フライブルク大学文学部近現代史に博士学生として所属し、博士論文執筆に向けて研究を行った。報告者の研究テーマは、戦後ドイツの移民史である。派遣留学期間中の受け入れ指導教員は、ウルリッヒ・ヘルベルト教授であり、彼は戦後ドイツ移民史研究における先駆者の一人に数えられる。本派遣では、史料調査及び専門家であるヘルベルト教授に指導を受けることを目的とした。

派遣では、ヘルベルト教授による指導のもと、博士論文のコンセプト設定を主に行った。戦後ドイツの「移民」は、社会学・政治学・歴史学を始めとし、多様な学問分野において重要な研究テーマとして位置づけられており、研究の蓄積も非常に多い。そのため、今回の派遣では文献調査に長い時間を費やした。調査のためには、主にフライブルク大学の付属図書館およびカリタス団体の図書館を利用した。論文には、移民自身の視点も取り入れる予定であり、調査の際には、研究文献のみならず、移民自身によって書かれた自伝の調査も行った。今回手に取った自伝の多くは、いわゆる移民「二世」・「三世」によってドイツ語で執筆されたものであった。博士論文では、1960年代に外国人労働者として来独した「一世」が主要な考察対象となるが、彼らの当時の経験は、これらの自伝の中で間接的に描かれているにすぎない。「一世」自身によって執筆された刊行物となると、トルコ語で書かれているものが大半である。このことは、1970年代から80年代に刊行されたトルコ出身者団体の史料等にも当てはまる。残念ながら、言語的な問題により、今回の派遣期間中にはこれらのトルコ語史料および刊行物に直接あたることはできず、ドイツ語で書かれている二次文献を利用しての調査に留まった。しかし、この先トルコ語史料を扱うことができるように、派遣期間中にトルコ語 I・II を受講した。フライブルク大学で博士論文を提出するためには、英語とドイツ語の他に、もう一つ言語を習得しなければならず（単位取得が条件）、トルコ語授業の受講はそのためにも必要であった。文献調査の傍ら、刊行史料調査も行い、シュピーゲル誌(Der Spiegel)、ツァイト紙(Die Zeit)そしてフランクフルター・アルゲマイネ紙 (Frankfurter Allgemeine)等の主要紙を利用して言説分析を行った。

また派遣期間中に参加したワークショップや、移民研究者との交流を通じ、多くの刺激を受けることができた。2011年3月18日には、フライブルク大学所属の研究所 FRIAS (Freiburg Institute for Advanced Studies Albert-Ludwigs-Universität Freiburg)で行われたワークショップ「外国人はドイツを変えたか？変えたとしたらどのように？」に参加した。ワークショップは、移民研究者として著名なマーレン・メーリング氏による基調報告、ヨーヘン・オルトマー氏およびデートレフ・ジークフリード氏によるコメント、参加者同士での討論の順に進められた。ワークショップでは議題の傍ら、移民研究、特に移民史研

究の現状と今後の課題についての議論が行われた。これらの議論は、当時、コンセプト設定の段階にあった報告者にとっては非常に参考となった。さらに、1960年代から80年代半ばまでのトルコ出身「ガストアルバイター」を専門とする、カーリン・フン氏から直接、博士論文執筆に関するアドバイスを受けることができた。彼女はヘルベルト教授の下で博士論文を提出しているため、当時彼女が収集した史料などが研究室に保管されている。この先、報告者もこれらの史料にあたる予定でいる。

【派遣の成果】

2011年11月27日には、東京外国語大学多言語・多文化教育センターが開催した、第4回多言語・多文化社会研究全国フォーラムで報告を行った。報告内容は、ドイツ連邦共和国における移民の「統合問題」であった。ここでは、それまでの派遣期間中に行った「移民統合政策」に関する調査成果をまとめることができた。

地道な文献調査と継続的なヘルベルト教授による指導の結果、2011年7月に入り、博士論文のコンセプトを明確化することができた。派遣当初は、トルコ出身外国人労働者とその家族が、1970年代・80年代のドイツ社会へ「統合」されていく過程を、社会史的に描くことに関心があった。しかし、方法論的に「統合」の実態を立証することが困難であるという理由から、別のテーマあるいは他の方向からのアプローチ方法を模索することになった。最終的には、83年に連邦レベルで実行された「帰国促進政策」に着目し、この政策が成立するまでの過程、政策が与えた影響、この政策に関する議論を考察することにした。結果的には、テーマに大きな変更はないが、「統合」を間逆の方向からアプローチすることとなった。「帰国促進政策」は、70年代から80年代初頭にかけての外国人労働者とその家族の滞在長期化に鑑み、新コール政権下（当時）において掲げられたものであった。考察は連邦レベル、州レベルで行い、州レベルでは連邦レベルに先立って外国人労働者および家族の帰国を「資金化」する政策を実施した、バーデン・ヴュッテンベルク州を取り扱う予定である。新たに設定したこのコンセプトに関しては、7月15日に行われたヘルベルト研究室ワークショップにて報告を行った。

【今後の課題】

本派遣の成果・課題について東京外国語大学側指導教員である相馬教授に報告、指導を仰いだ後、引き続き、フライブルク大学での研究活動を継続する。新学期が始まる2011年10月半ば頃までに、博士論文の要約をヘルベルト教授に提出するため、当面はその執筆にあたる予定である。それをもとに、今後史料収集と調査を行う。2011年11月頃から2012年夏頃までコブレンツの連邦文書館及びフライブルクのカリタス団体文書館等で文書史料調査を行い、その後博士論文の執筆作業に入る。論文の提出は2013年夏を予定している。

以上